

人間の肉体という重いリアリティー。このリアリティーは、時の移ろいと共に、やがて薄れ、消滅してゆくだろう。生誕から死に向かう人間生存のプロセスは、希望から絶望へと向かうそれであるけれど、そのプロセスの一瞬一瞬こそが、人間の至福であるならば、その一瞬に自己の表現行為を賭けねばなるまい。

画家・水谷ルミの芸術的課題は、きわめて深く、大きい。彼女は、なぜ描くのかと自己に問いを投げかけ、朽ちゆく肉体に対し、芸術的感動が、まぎれもなく残存することを、素朴に信じる。彼女は画家ベーコンのいう「直観」に触発される。直観とはベーコン流に言えば、生と死、肉体の苦痛などに対して、自己がまっとうに感じることを信じることだ、と考えられよう。この直観は、消しがたい生存の痕跡なのだから。

水谷ルミの描く人間像は、だが、およそ女性の持つ繊細な感覚とは縁遠い。日本的感性のなかに育ってきた彼女だが、彼女の感覚や思考はヨーロッパの伝統的な文化の中で変化していったものだろう。描かれたどの人間像も、肉のかたまりの、ややグロテスクな姿を眼前にさらけ出している。身体の一部と顔を隠しながら、ソファーに横たわる裸婦。真赤な背景に吠える犬の前に、寝そべる二人の裸婦。頭部を切断され、そこから血のようなものが吹き出ている裸婦は、脚立の上に座っている。これらの裸婦は、大胆で、自由奔放とも思われる筆遣いと色彩によって、自己の肉体の、たしかに現存する肉体を誇っているようだ。しかし、この誇りと反比例して内在するものはニヒリスティックな肉体のかげりだろう。

私にとって、とくに興味深い作品がある。それは、真赤な十字架に掛かった裸婦像だ。モチーフに十字架が描かれているからといって、キリスト教的な内容を汲み取るのはおそらく早計だろう。裸婦は、犬の上に立ち、十字架に掛かっているからだ。とはいえ水谷ルミが絶望にあえぎつつ天を仰ぎ見るキリストの姿を思い浮かべたとしても、不思議ではあるまい。ここで彼女が問題としたものは、広義の“蘇生”のイメージの形象化なのだろう。死から決して逃れようもない人間の生を、永遠なるものへと高めてゆくこと、その視覚的なイメージの可能性の追求なのである。裸婦におそいかかると見える激しい十字架の赤のパステルのタッチに彼女の頭部は揺れ動いている。

だが、裸婦の重みに、座り込みそうになっている犬は何だろう。犬は、水谷ルミの好みのモチーフのひとつだが、絶えず人間の肉体と対比されているように思われる。とすれ

ば、何のメタファーなのか。いろいろと考えられようが、私は、死への強迫観念を持たない生き物のメタファーであると思う。しかしこの生き物は、人間をも含まれていることを、水谷ルミはアイロニカルに描くのだ。

水谷ルミの作品群は、彼女の画歴からすれば、今、ひとつの段階に達していよう。彼女のユニークな人間像は、その肉体という生存の証をもって、ますます肥大してゆくのであろうか。彼女のいう“精神空間の構築”に、人間像の変化も余義なくされる時がくるだろう。

美術評論家 佃 堅輔

パリ、三月二十二日